

意見陳述書

2016年7月13日
草 地 妙 子

私は、名古屋でごく普通に日常生活を営む主婦であり、16才の息子と12才の娘を持つ母親の1人です。

今年6月20日、老朽化した旧式の高浜原発1、2号機の運転期間が延長されました。それにより、私たちの生活は、いま重大な危険にさらされています。

福島第一原発事故を経て、私たちは、ひとたび原発事故が起きれば、人々の普通の生活が、日常が、文化が、生命が、街全体が一瞬にして破壊されることを学びました。

それなのに、本件原発の運転期間が延長され、私たちの生活は、もはや一瞬にして吹き飛びうる危ういものとなってしまいました。福島第一原発事故からわずか5年ほどしか経っていないのにです。

福島第一原発事故については、未だ原因解明や被害の実態も明らかとなっていません。チェルノブイリ原発事故の内部被ばくによる健康被害としてIAEAが甲状腺がんを認めたのは、事故から10年後のことです。いま私たちが目の当たりにしている被害はごく一部であり、今後、様々な問題が噴出する可能性をいろいろな専門家が指摘しています。それにもかかわらず、日本で原発再稼働の動きが加速していることが、私にはどうしても受け入れられません。

本件原発で、福島第一原発事故のような、あるいはそれ以上の過酷事故が起こったら、私たちはどうなるのでしょうか。福島第一原発事故の際、風は西から東に向かって吹いたため、放射能はほとんど海側へ流れていきました。それでも、放出された大量の放射能は、広範囲に拡散し、190kmほども離れた千葉県柏市でも放射線量の高い「ホットスポット」が存在しています。

一方、名古屋は本件原発から南東に約130km、偏西風の風下地域です。偏西風の影響をもろに受け、名古屋とその周辺地域にも多くのホットスポットができるでしょう。愛知県だけで約750万人、日本の三大都市圏である中京圏を含めれば、1000万人を超える人々の生活に極めて重大な影響が生じることは間違いありません。

福島第一原発事故の2週間後に内閣府原子力委員長が作成した「最悪シナリオ」では、170km圏内がチェルノブイリ原発事故の強制移住地域の汚染レベルになると試算されました。

母親として一番の不安は、子どもたちの健康被害です。子どもは大人に比べて放射能への感受性が桁違いに高いといわれます。特に、食べたり、吸い込んだりすることによる内部被ばくでは、将来、どのような形で子どもたちの身体に影響が現れ

るかは未知数で、考えるだけでとても恐ろしいです。

実際、食品中の放射性物質についての基準値は、内部被ばくを軽視しているとの指摘もあり、安全を保証してくれるものではありません。自分の子どもの命が少しずつ削られていくかもしれない。スーパーで食品を手にするとき、そんな不安が頭をよぎるのを「考えすぎだ」「放射能は少しぐらいなら大丈夫」と切り捨てることはできないのではないのでしょうか。

私は、福島第一原発事故の際、避難所で防護服を着た大人に線量計を当てられている子どもの姿が今も忘れられません。あの子は、放射能の塵をどれだけ吸い込んでしまったのでしょうか。本件原発で事故が起きれば、今度は、自分の息子や娘が同じ目にあってしまうのです。

仮に避難ができたとしても、その後の生活を考えると胸が重苦しくなります。福島第一原発事故でも、現在も母子避難をし、父親とは離れて暮らさざるを得ない子どもたちや、放射線量が高い地域だとわかっていながら経済的な理由で帰還せざるを得ない人々が多くいます。その姿は明日の私たちかもしれない、それを覚悟できなければ、原発の安全性を判断することなどできないはずではないのでしょうか。

本件原発が再稼働されてしまうと、私たちは、危険と隣り合わせの生活を強いられることとなります。それなのに、政府や原子力規制委員会は、事故の反省の上に立つことなく、私たちの声に耳を傾けようとする姿勢すらありません。

かつて、原発の「安全神話」が日本中を支配していたころ、原発の話題は人々の間でタブー視されていたように思います。「原発反対」は政治的なイデオロギーと結び付けられがちで、それを口にした途端、異端視されるような空気が漂っていたようにも思います。

しかし、福島第一原発事故を経験したことで、今では、主婦や母親たちの間でも原発の話題はタブー視されることはなくなりました。私の周りでも、「原発事故の反省がなければ、またあの悲惨な事故が起きてしまうのではないか」「誰も安全と言わない原発を動かすのはおかしいのではないか」という声をよく耳にします。私たちは、守るべき日常の大切さを思い知ったことで目が覚めました。たった一度の事故で、誰もが望む当たり前の幸せを奪うことは、到底許されることではありません。原発を稼働させないでほしい、廃炉にしてほしいというのは、主義や理念ではありません。私たちの心の底からの切実な願いです。

どうか、裁判官の皆様には、私たちと未来にわたる市民の幸せを守るべく、司法の責任を全うしていただきますようお願いいたします。私のような思いを抱く日本中の主婦や母親を想像するのは難しいことではありません。今、こうして聞いてくださっている裁判官の皆様が最後の砦であり、私たちの希望です。

以上